



新年明けましておめでとうございます。
本年も、院内感染対策の推進・抗菌薬適正使用にご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

1月に注意すべき感染症について



新年あけましておめでとうございます、今年もICT、ASTをよろしくお願いいたします。年明けの1月に注意すべき感染症として、まずは新型コロナウイルス感染症をあげさせていただきます。

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症の報告数は、11月の中旬頃を最少値として、その後は一貫して増加が続いています(全国平均値は第50週までで4週間連続、大阪府は第51週まで6週間連続)(図1)。加えて、この1年間はXBB系統とその派生株(EG5.1やHK.3等)が国内流行の中心でしたが、12月は新たにBA.2.8.6系統とその派生株(現在はJN.1が最多)に急速に置き換わりつつあり、国内の流行株は1月中旬にはこの新たな系統株にほぼ置き換わるものと予想されます。この新たな系統株は、過去2年間に流行していたBA.2系統株や、XBB系統株と比べて、スパイク蛋白のアミノ酸配列に多数の変異があり、免疫逃避に優れている可能性が高いことが以前より指摘されてきました。以上より、冬期の新型コロナウイルス感染症の流行は、まだ詳細な予想はできませんが、ある程度大きな流行規模となると思われます。

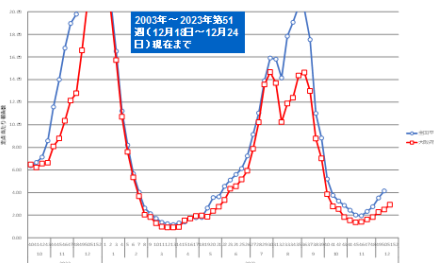


図1. 新型コロナウイルス定点当たり報告数週別推移(全国、大阪府:2022年第40週～2023年第51週)

インフルエンザ

次にインフルエンザについて、2020年から2022年にかけて、新型コロナウイルス感染症の流行期間中にインフルエンザの国内流行はほぼ見られませんでした。2023年は小さな流行後のだらだらとした患者発生が続き、秋期に入って以降は患者発生数の増加傾向が継続しています。2023年第49週には、インフルエンザの定点当たり報告数の全国平均値は警報レベルである30.0を超えています。1月以降のインフルエンザの患者発生ですが、過去3年近くに渡ってインフルエンザの流行がみられず、感受性者が蓄積した状態が、2023年の1年間で解消されたとはまだ考え難く、1月に入れば現在よりも更に大きな規模の流行となる可能性は十分にあると予想されます。一方、2022年まで3年間に渡ってインフルエンザの流行に負の影響を与え続けてきた可能性の高い新型コロナウイルス感染症の1月の流行が、どのようにインフルエンザの患者発生に作用するかはまだわかりません。いずれにせよ、新型コロナウイルス感染症、インフルエンザ共に1月は要注意です。

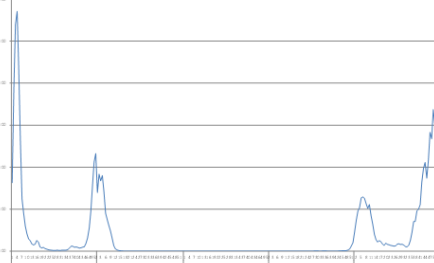


図2. インフルエンザ定点当たり報告数の全国平均値の年別・週別推移(2019年～2023年第50週)

マイコプラズマ肺炎

最後に、マイコプラズマ肺炎について言及します。2024年は中国や韓国でマイコプラズマ肺炎の流行が見られましたが、日本では2016年に流行が見られて以来、7年間に渡って流行が見られていません。1月に入るとは言いませんが、2024年の春以降に国内でも8年ぶりにマイコプラズマ肺炎の流行が見られる可能性は高いと考えられ、その場合は2023年の中国や韓国のように、これまでの流行よりも大きな規模となる可能性があります。2024年はマイコプラズマ肺炎の流行に注意しておく必要があります。(感染管理室 安井 良則)

感染管理認定看護師が3人体制になります!!

はじめまして。この度、日本看護協会 認定看護師 認定審査に合格し、**感染管理認定看護師(CNIC: Certified Nurse in Infection Control)**としてICTメンバーに参加させて頂くことになりました**永田 夏子**です。よろしくお願いいたします。

当院では、感染管理室長の安井良則医師を中心に医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務員が連携し、院内各部署のラウンドによる薬剤耐性菌・感染対策の評価、感染症に関する相談、職員を対象とした研修会の開催、感染症発生時の対応など、患者さんと職員を感染から守るため活動をしています。

感染対策においては、感染管理認定看護師が中心となり、各部署と連携しています。現場での感染対策には、みなさんのご協力が必要となります。引き続き、ご協力をお願いします。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、発熱外来の運営などで経験した感染対策を活かし、**感染管理認定看護師**としてICTメンバーに加わり、**新たに3人体制**で院内の感染防止に努めていきます。今後とも、よろしくお願いいたします。(感染管理室 永田 夏子)



川口 尚子

永田 夏子

堀越 敦子